



PHASE
01
プレデザイン

「家を開きたい！」という思い（ただし予算0円）を、プロジェクトへと編み上げていく

- ・資金計画 / 運営計画 / プログラムづくりから関わることの可能性

「賃貸で借りている物件だけど、大家さん曰く好きにいじっていいと」「自宅兼NPOの事務所として、いろんな人が気軽に立ち寄れる場所にしたい」という相談を、同世代の若者から受けた。ただし予算は0円。ただ、彼の飾らない風通しの良い人柄や、ボロ屋ではあるその建物の、びよこっと道に顔を出しているような佇まいに惚れ、組みづくりから関わることにした。次第に6名程の運営メンバーが集まり、資金計画やプログラムづくりを、設計と並行して進めた。

PHASE
02
リサーチ

「声にならないまちの声」に粘り強く耳を傾ける「取材」

- ・見聞きした「取るに足らない話」たちを記録した「出来事の地図」
- ・丘に広がる住宅地の「地域素材」を活用し、まちの記憶を繋ぐ

二軒長屋をまちに開くことを考えたとき、まちの人から意見を聞くことが大事だと思った。最初は人が集まらなかったワークショップも、「東ヶ丘新聞」という独自の地域新聞をつくるなどして、やりたいことと動機を発信続けた。すると自然と様々な情報やものが集まるようになった。見聞きした出来事は記録し、空家から建具や家具を頂いてはストックしていく。

PHASE
03
建築デザイン

ふらっと立ち寄るハードルをさげる「透明性」

見ず知らずの人と隣りになっても気まずくない「多中心性」

- ・左右対称の二軒長屋の構成を活かす。ホールを中心とした平面計画
- ・道からの連続性と身体寸法に留意した断面計画
- ・参加型施工ならではの空間の質

1階を町に開くあたり、気楽に入れることが、多様な居場所があることを目指した。断面では道から広間まで段状の構成をとり、縁側のように座るきっかけを多く用意したり、歩行者の目線の高さに留意した計画とした。平面では左右対称の既存形式を活かし、中央吹抜広間を4周の特徴的な空間が取り囲むような計画とし、緩い規律のある多中心的な空間とした。通りに面する6畳の部屋は減築し、立寄せやすい軒下となった。

PHASE
04
運営

丘のまちに棲みつく建築家ができるこ、を考える

- ・隣に事務所を構え、場所の持続可能にする方法を一緒に考える。
- ・徒歩5分圏内に広がるプロジェクト。丘の住宅地の未来を考える。

設計者である私たちはオープンしながらも運営メンバーとして参加し、場所がいきいきと利用されるための工夫を考えている。事務所も同じ敷地内の建物に引っ越し、過度な負担無く関わることができる（事務所併設のショールームとしてCASACOが機能していることは言うまでもない）。徒歩圏にあらたなプロジェクトが2つ生まれ、丘全体を意識しながら設計活動を行っている。



改修前の CASACO。築 65 年以上の二軒長屋
教育・旅・まちづくり・建築に関心をもつ運営メンバーによって仕組みづくり。今まで毎週 MTG を行っている。



地域住民からまちのことを聞くワークショップ
大正時代から野毛坂に敷かれていた石畳が剥がされる



漆喰を塗り直すワークショップには近所の子どもも参加
減築によって生まれた軒下に石畳を敷くワークショップ。
80名ほどの地域住民が参加した。



隔週日曜日朝に実施する「世界の朝ごはん」には、近隣や遠方から多くの人がつまり、テーブルを囲む。
近所のお母さんが企画した「CASACO に苗を植えよう！」ワークショップ。

出来事年表

